

記憶について勝手な仮説

記憶には、

1. 感覚記憶・・・一瞬的なスナップショット（絵画的記憶）
2. 短期記憶・・・ある程度は記憶しているが、わすれてしまう。（絵画的記憶）
3. 長期記憶・・・ほぼ失われない。（映像的記憶）

取り出されるたびに少しずつ変化、変質する。

すなわち、記憶は、書き換えられる。

※訓練・・・繰り返し訓練すれば、上達する。犬を訓練するのとほぼ同じ。

これも記憶といえ、記憶になるかもしれない。

○記憶とは、「抗体の原理」に従っている。

- ・ばい菌という抗原が、体内に入ってきたとき、それをやっつける抗体ができ、ばい菌を殺すという身体の仕組みがある。これと同じように記憶は、いつも脳の中にあるわけではない。刺激によって呼び出されるのである。だから、呼び出されるたびに少しずつ変化、変質をする。

○長期記憶を質の高いものにするためには、

時間的経過に従って質の高い映像的イメージを持つことである。

そのためには、

1. 目で読むよりは、読み上げてもらって聞く。
2. 形・におい・色・大きさ・手ざわりなどを加味して場面設定をする。
3. 半具体物を動かして、具体化する。
4. 動作化をして、イメージを助ける。
5. 意味付けをする。
6. 意味を与えて、物語にする。

そして、これに加えて必ず必要なのは、「**時間的経過**」である。

「**時間的経過**」がなければ、映像とはならないのである。

○しかし、それだけでは、呼び出されるたびに変化、変質する。

それを防ぐには、この映像的イメージを「絵画的イメージ」にすることである。

「映像的イメージ」と「絵画的イメージ」を常に照合しながら、記憶を呼び出すと変化、変質を抑えることができるのではないかと考える。

記憶を長期化し、正確にしかも鮮明にするためには、

映像的（動的）イメージと自分で表現した絵画的（静的）イメージを一緒に記憶することである。

○子どもたちは、

①絵画的イメージ（教科書・文・絵）から頭の中に映像的イメージをつくる。

②その映像的イメージを使って思考し、絵画的イメージにして表現する。

というステップで学習していると考える。

学力の低い子どもは、①のステップがうまくいかないのではないかと考える。

そこで、①のステップを支援してやれば、理解力・記憶力が伸びるのではないかと考える。

最終的に子どもたちに獲得させたいことは、子ども自身の力で、

絵画的イメージ→映像的イメージ→自分で表現した絵画的イメージ

のステップをたどることである。

そして、記憶は、映像的イメージと自分で表現した絵画的イメージで記憶する。

○具体的に①のステップを支援する方法

①算数科においては、

問題解決的学習展開において、

①時間的経過に従って、

②映像的イメージをもたせ、

③それを絵画的イメージにする作業を続けることで、

問題解決の力が育つのではないだろうか。

より具体的には、

①時間的経過を守るために

1. 読んで聞かせる。

2. 文章の順にメモさせる。または、イメージさせる。

②質の高い鮮明な映像的イメージをもたせるために

1. 形・におい・色・大きさ・手ざわりなどを加味して場面設定をする。

2. 半具体物を動かして、具体化する。

3. 動作化をして、イメージを助ける。

③絵画的イメージをもたせるために

1. 映像を1枚に絵にするために動きを表す記号を使わせる。

2. WBに書かせる。（書くことへの抵抗を少なくする。）

3. スケッチさせる。絵に描く。（情景図）

「情景図」「○図」「線分図」「数直線図」「面積図」など

○他教科では、

1. 国語科

- 絵画的（静的）イメージを映像的イメージにすることで理解を深めることができる。

2. 社会科

- 絵画的（静的）イメージを映像的イメージにする。そして、用語を中心に映像的イメージを切り取って絵画的イメージをつくる。

3. 理科

- 映像的イメージから切り取って絵画的イメージをつくる。

こんな感じにならないだろうか。

ここをできるだけ児童主導に変えていけるとよい。

